第14課　十字架を誇る

【暗唱聖句】

「しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです」ガラテヤ6:14

【今週のテーマ】

キリストの十字架を前にしたとき、人間の知恵も富も力も全く無力であることを知ります。ただ十字架だけを誇ることが、クリスチャンの生き方であることを学びます。

【日曜日・パウロ自身の手】

ガラテヤの手紙の結びの言葉を見ると、他の手紙の結び方とは異なることに気が付かされます。それは必ずしも一様ではないのですが、基本的には①挨拶の言葉、②最後の勧め、③パウロ自身の著名、④結びの言葉という構造になっています。しかし、ガラテヤの手紙の最後はこれとはかなり異なっています。

　まず、挨拶の言葉がありません。たとえばピリピやコロサイでは次のような挨拶の言葉が最後にあります。

「キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たちに、よろしく伝えてください。わたしと一緒にいる兄弟たちも、あなたがたによろしくと言っています」（ピリピ4:21）

「ラオディキアの兄弟たち、および、ニンファと彼女の家にある教会の人々によろしく伝えてください」（コロサイ4:15）

手紙の書きだしでも慣用的な感謝の言葉がないことから、そこにパウロとガラテヤの人々との間にある緊張関係を読み取ることができそうです。

また、通常パウロは手紙を書くときには筆記者に書かせて、最後に自分の手で書いた一言を付け加えて終わるのですが、ガラテヤの手紙では、この一言が長く、また、「このとおり、わたしは今こんなに大きな字で、自分の手であなたがたに書いています」と、強調しています。このことから、パウロがいかにガラテヤの教会のことを心配しているのかが伝わってきます。

【月曜日・肉について誇る】

「肉において人からよく思われたがっている者たちが、ただキリストの十字架のゆえに迫害されたくないばかりに、あなたがたに無理やり割礼を受けさせようとしています。割礼を受けている者自身、実は律法を守っていませんが、あなたがたの肉について誇りたいために、あなたがたにも割礼を望んでいます」ガラテヤ6:12、13

無理やり割礼を受けさせようとしている人々には特徴がありました。一つ目に、肉においてよく思われたい、誇りたいということ、二つ目に迫害されたくないということでした。このような動機から、割礼を強要してくるわけですから、キリストの福音からも当然それてしまう結果となりました。つまり、救われた喜びを奪い取ってしまうのでした。

　彼らは、社会的に影響力を持っていたユダヤ教の宗教指導者たちと良好な関係を築くことに熱心でした。そのために異邦人たちにも割礼を要求し、律法を守るように強要したのでした。彼らがよく思われたい、迫害されたくないというのは、このような社会的、政治的に力を持っていたユダヤ人宗教指導者に対してでありました。

そして、異邦人クリスチャンたちに割礼や律法を守ることを要求するとき、自分たちは割礼を受けている、自分たちは律法を守っているという誇らしい気分を生じさせました。実際には律法を守るとは見せかけだったのですが、自分たちが優位にあることに酔いしれるのは十分でした。パウロに言わせれば、それは肉の誇りであり、クリスチャンが最も注意しなければならない罪でした。

現代教会も同じ誘惑に陥ることがないように注意しなければなりません。周囲の人たちに対して、それがクリスチャンであろうとなかろうと、良いかっこうをしたいという誘惑、悪く思われたくないという誘惑、霊的に上にいたいという誘惑など、それらはすべて肉に属するものであり、人を躓かせるものです。キリストの十字架を前にしたとき、すべてが砕け散ってくものです。

【火曜日・十字架を誇る】

「しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです」ガラテヤ6:14

パウロが伝えたいと思っている福音メッセージの中心に十字架と義認があります。ガラテヤ6:14では、その十字架について述べられていますが、「イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません」と教えています。

　当時、十字架刑というのは、ローマの処刑法の中でも最も残酷なものでした。ローマ市民の中にさえ、十字架刑をひどく不快に思っている人は少なくありませんでした。ましてやユダヤ人たちにとって十字架は嫌悪するものであったので、十字架につけられたメシアという考えを快く思うのは難しいことだったでしょう。しかし、それが残酷で不快なものであればあるほど、神の御子は人類を救うために、その残酷で不快な処刑方法で死なれたということに大きな意味が生まれるのです。

また、十字架のみを誇る、その「誇る」という言葉は、「喜ぶ」という言葉がある言葉です。十字架にのみ私たちの救いがあります。だから、十字架は喜びであり、それゆえ誇りなのです。パウロが十字架のみを誇りとしなさいというとき、それは十字架のみを救いの喜びとしなさいということでもあるわけです。

また、ここでパウロが言いたいことは、主イエス・キリストの十字架を誇りなさいというよりも、他に誇るものがあってはならないということです。人間はすぐに自分を誇りたくなります。しかし、自分自身を誇るものは、キリストの十字架を無意味なものにしています。その人は福音の外にいます。自分に自信がなくても良いのです。無力で良いのです。神様の前に誇れるものなどただの一人もいないからです。しかし、わたしたちは自分ではなく、主の十字架を誇ることができるのです。そして、それは大きな喜びなのです。

【水曜日・新しい創造】

「割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです」ガラテヤ6:15

パウロは大切なことは割礼の有無ではなく、新しく創造されることだと主張しています。割礼と福音という関係においては相対するものとしてパウロは描いていますが。だからといって割礼そのものを否定しているわけではありません。福音理解がきちんとできていれば、しても、しなくても良いという立場です。むしろもっと大切なことがあると言います。それは新しくされることです。「創造」と訳されている言葉は、創造主の行為を暗示しています。つまり、人間の努力によって新しくなることはできないということです。イエス様はこの過程を「新しく生まれる」と表現しています。これは霊的に死んでいた人に対して、神が霊的命を吹き込まれる行為です。確かに、これは神秘的な体験ですが、難しく思う必要はないことをパウロは別の箇所で語っています。

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」第二コリント5:17

キリストと結ばれているかどうかがカギとなります。もしキリストと結ばれているのなら、誰でも新しく創造されたものであると言います。キリストと結ばれているのなら、誰でもとありますので、キリストと結ばれている人で新しくされていない人はいません。また、その後の歩みにおいても、常にキリストに結び続けることが大切で、それによって、さらに新たにされていきます。年齢とともに疎なる人は衰えていきますが、内なる人は逆に日々どんどん新たにされていくのです。こうして神の子としてわたしたちは完成されていきます。

【木曜日・最後の言葉】

「このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように」ガラテヤ6:16

「原理」と訳されている言葉は、もともと石工や大工が図るために用いたまっすぐな棒を表す言葉で、やがて人が何かを評価するために用いる基準や標準を指す比喩的な言葉となりました。これまでの流れからいくと、パウロがこのような原理と言っているのは、割礼の有無は関係がない、大切なのはキリストの十字架のみ、そしてキリストによって新しくされることなのだということでしょう。

「これからは、だれもわたしを煩わさないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に受けているのです」ガラテヤ6:17

「焼き印」というのは、主人が奴隷や家畜を自分の所有であることを示すために焼き印を押しました。これは、それが他の誰のものでもない。主人のものであることを現わす「しるし」でした。パウロはイエスの焼き印を身に受けていると言っています。つまり、主イエスのものであるしるしを身に帯びているという自覚をもっていきていたことがわかります。

また、このように表現する背景には、イエスの名のゆえに迫害によって実際にたくさんの傷を受けたということや、イエス様の受けられた傷が自分の傷のように受け止めていたのかもしれません。パウロは「キリストの焼き印」とは言わずに、「イエスの焼き印」と言っていますが、パウロがイエスと言う時は、私どもと同じ肉体をとられ、人間となられたイエスという意味で言っています。主イエスは十字架のために、肉体に様々な傷を負いましたが、その傷は全て私たちのために負われた傷でした。パウロは主イエスの十字架の傷こそ、私のために負われた傷なのだといつも心に刻んでいたのでしょう。主イエスが十字架で受けられた傷によって、私は救われ、癒されたのだ、とパウロはいつも心に刻んでいたのでしょう。